

新たに習近平に期待するもの

1、はじめに

[天命思想による政治](#)、それが中華のあるべき政治であるが、はたして習近平がそういう政治を今後やっていけるかどうか？ 私は、今皇帝になった習近平に是非それをやってもらいたいと願っている。そのためには、孟子の天命政治を貫いてほしいし、日本と一緒に世界平和路線を歩んで欲しい。それが習近平に期待するものである。

そのためには、習近平が今皇帝として中国共産党王朝に君臨し、中国共産党の中で絶対的な権力を持たなければならない。その前提条件として、習近平は軍を掌握することと農民の支持を受けることが必要である。その上で、中華政治として世界平和路線のための政策を打ち出すことが必要である。覇権主義はもつてのほかである。習近平がそれらのことができる人物であるとして、習近平に対する期待を書いたものが私の論文「習近平に期待するもの」である。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/syuukin.pdf>

2、 習近平同志を核心とする党中央

私は何の力もない一介のしがな日本の一国民でしかないのに、私の期待など何の意味も持たないが、習近平がその後中国共産党の絶対的な権力者として最高指導者として道歩んでいることは、中国のために、否、世界平和のために誠に喜ばしいことである。

2016年10月、党中央委員会第6回全体会議（六中全会）が四日間にわたる会議の成果を盛り込んだコミュニケを全会一致で可決した。そのコミュニケの中には「習近平同志を核心とする党中央」という言葉が盛り込まれた。共産党はそれまで「習近平同志を総書記とする党中央」という言い方をしてきたが、この大会を境に習近平総書記を公式に党の「核心」と位置付けたのである。

かつて共産党の「核心」と呼ばれた総書記は「建国の領袖」と呼ばれた毛沢東、「改革開放の総設計師」鄧小平、そして江沢民の三人しかいない。天安門事件で失脚した趙紫陽の後任として急遽抜擢された江沢民の場合、時の最高実力者だった鄧小平が党の動揺を抑え

るため、「核心」と呼ばせて権威づけたとされる。それを思えば、カリスマ的指導者の後ろ盾を持たない習近平が、総書記就任からわずか四年で毛沢東や鄧小平と同じ高みに立ったことの意味は重い。

その二週間前、北京では待遇の改善を求める退役軍人が全国から集結し、軍の最高幹部らが使う「八一大楼」を取り囲む騒ぎがあった。米国では大統領選が最終盤を迎え、既成政治を打ち破ると訴えるドナルド・トランプが、優勢と見られていたヒラリー・クリントンと激しい闘いを繰り広げていた。軍の再編や経済の構造改革など国内の改革が正念場を迎え、世界が混迷の度合いを深める中、共産党は習近平にこれまで以上に強大な権威を与え、そのリーダーシップに国の行く末を委ねたのだった。

3、「中華民族の偉大な復興」という壮大な夢

習近平はよく語り、よく動くリーダーだ。経済改革、農村問題、軍の再編、外交、反腐敗、インターネットの管理、食品の安全など次から次へと新しい方針や政策を打ち出し、「重要講話」を繰り返している。その中で、特に、2012年11月の演説は、習近平の政治理念と中国の行く末を理解する上で大事なものであるので、それを以下に紹介しておきたい。

改革開放以来、我々は歴史を総括し、苦しみながら探究を続けた末について「中華民族の偉大な復興」を実現するための正しい道を見出した。我々はこれまでのどの時代よりも、「中華民族の偉大な復興」という目標に近づいている。すべての党員は肝に銘じてほしい。落後すれば叩かれるのであり、強くあるためには発展を続けなくてはならないということ。肝に銘じてほしい。正しい道を見出すのがどれだけ大変なことであったかを、我々はこの道を迷わずに進む。いま、多くの人が「中国の夢」を語っている。私は「中華民族の偉大な復興」こそが近代化以来、中華民族が目指してきた最も偉大な夢だろうと思う。一人一人の未来と運命は、国家や民族の前途と運命を深く結びついている。国が良くなり、民族が良くなってこそ、一人一人が良くなれる。「中華民族の偉大な復興」は光栄であるが困難な事業であり、そのためには代々の中国人がともに努力していかなければならないのである。

2012年11月の演説は以上のとおりであるが、哲学的であり、非の打ち所のない政治理念である。これだけの演説をできる政治家は世界広しといえども習近平しかいない。

「中華民族の偉大な復興」は、習近平がその後、何度も繰り返すことになるキーワードだが、それを叶えることが共産党の使命であり、共産党が中国を率い続ける理由だと言っているのである。

4000年の歴史を誇る中国の人々が「中華民族の偉大な復興」という壮大な夢を抱くことは、ごく自然のことである。その際に私たちが注意しなければならないのは、その夢の曖昧さと時間軸の長さである。時代は動いている。世界の政治や経済、それに文化も動いている。そういう世界情勢の中で、一口に「中華民族の偉大な復興」と言っても、その内容は漠然としたものにならざるをえない。その内容は、時代とともに変わっていく。固定したものではないのである。進化し続ける、そのことが大事なのであって、「中華民族の偉大な復興」という壮大な夢が世界の人々がある程度納得できる形で達成されるまでには、相当の時間がかかるであろう。しかし、どれだけの時間がかかろうと「中華民族の偉大な復興」という壮大な夢を抱くことが大事である。

4、中国伝統文化

林望は、その著書「習近平の中国」（2017年5月、岩波新書）の中で、中国文化について、次のように述べている。すなわち、

『 中国が歴史的に見て偉大な文明国家であり、多くの文化や価値観を生み出してきたのは間違いない。王岐山はフランシス・フクヤマらとの会談で「中国文化の中には優秀なDNAがある」と述べ、その歴史と自負を語った。しかし、中国文明の遺伝子は、様々な文化や民族が混じり合い、諸子百家と言われた思想家たちがそれぞれの主張を競ったような社会の多様性と寛容さの中で育まれたのではないか。』

私もそう思う。中国の長い歴史の中で「諸子百家」という言葉がある。諸子百家（しよしひゃつか）とは、中国の春秋戦国時代に現れた学者・学派の総称である。「諸子」は孔子、老子、莊子、墨子、孟子、荀子などの人物を指す。「百家」は儒家、道家、墨家、名家、法家などの学派に属する多くの人々のことである。

春秋戦国時代（しゅんじゅうせんごくじだい）は、中国史において、紀元前770年に周が都を洛邑（成周）へ移してから、紀元前221年に秦が中国を統一するまでの時代のことである。その時代に活躍した諸子百家、そのような多くの学者が政治に関与した、そういう

歴史は世界の歴史でも珍しく、中国伝統文化の一つと考えられる。しかし、そういう中国伝統文化は、いわゆる諸子百家の時代に花咲いたとはいえ、その下地はもっと古い時代にある。政治に大きな影響を与えた思想家が少なからずいたのである。その代表が晏嬰（あんえい）である。

晏嬰（紀元前500年頃の政治家）は、中国春秋時代の齊の政治家。学派を形成したわけではなかったのに、諸子百家には入らないが、当時の王朝の中でもっとも偉大な思想家である。中国春秋時代には多くの学者が王朝の政治に大きな役割を果たすが、その源流に晏嬰がいるのである。

晏嬰の時代から、150年～200年ほど後になるが、紀元前4世紀（紀元前400年から紀元前301年まで）田齊の盛時をもたらした威王や宣王は、各地から多くの学者を集めた。彼らは日々論争し、人々はこれを百家争鳴と呼んだ。稷下の学士（しよくかのがくし）は、直接齊の政治に関与する人々ではなかったが、卿につぐ次官級の俸禄を与えられて優遇された。人数は、数百人から千人ともいわれている。おそらく彼らは齊の政府が政治を行う上での案を採る対象として招かれた、もしくは集まった人々であると思われる。

中国の伝統文化として忘れてならない一つに道教文化がある。晏嬰が面白いと同じように、道教も面白い。こだわりがないからだ。日本の宗教は神仏習合の歴史を持っているが、道教は、老子の教えを基軸に、老子の教えと孔子の教えと仙人の教えという三つの教えが習合しながら発達してきたものである。

以上は、道教文化について勉強するとともに、天命政治の成功のために今後何が必要かを私なりに考えてみた論文の要旨である。諸子百家や晏嬰のことなど詳しくは、その論文「中国伝来文化を考える旅」をご覧ください。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tyuuden.pdf>

中国にも憲法がある。その憲法は、中国共産党が英知を集めて、作り上げたものであるのに、今後改正があるにしても、当面、それを大前提に正しく政治が行われればそれで良い。今皇帝（中国共産党の最高権力者は、今で言えば昔の皇帝のようであるので、私はは、中国共産党の最高権力者と呼んでいる）は憲法から逸脱するような勝手な行動をとってはならないし、常に「天の道」に即して、秩序維持のために社会に過度に干渉することは避け、さらに統治にかかるコストを下げるようにしなければならない。道家の中から、老子哲学をしっかりと身につけた名僧が生まれでてくれば、その人物の指導を得て、今皇帝はそういう政治を行うことができる。そうすれば、これからも中国は天命政治を続けることができる。中国共産党一党独裁の政治を続けることができるのである。

私たち日本人は、その長い歴史の中で、中国からの伝来文化の恩恵を受けてきた。現在の日本文化のほとんどのものが中国からの伝来文化の影響を受けている。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tyuudenrai.pdf>

そういう私たち日本人であるからこそ、本来日中友好親善を深めなければならないのであるが、最近の話としては周恩来のご恩を忘れてはならない。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/nityuusaisin.pdf>

私たち日本人は、日中友好親善を深め、「中華民族の偉大な復興」のために出来る限りの事をしなければならない。それを前提として、中国は、「中華民族の偉大な復興」のために是非とも「道教文化」の復活を目指して欲しい。その方向に向かって歩み始めること、それが私の「新たに習近平に期待するもの」である。

まずは長い時間軸の中ではあるが、道家の中から、晏嬰など「社稷の臣」の思想に学びながら、老子哲学をしっかりと身につけた名僧、そういう人物が出てきて、中国の天命政治が続くこと、中国共産党一党独裁の政治が続くこと、そしてその結果として「中華民族の偉大な復興」が実現されることを願ってやまない。